

## 『訴歌』

2021年07月26日

元三省堂編集者の阿部正子氏が『訴歌 あなたはきっと橋を渡って来てくれる』を編集、出版している。ハンセン病者の生きた証しを綴った膨大な作品を集めた『ハンセン病文学全集』から、三千三百余の短歌、俳句、川柳を抜粋して、詩情や日常生活語で分類して編集した歌集である。阿部氏は「人はどんな過酷な状況の中でも誇り高く、生き抜けることを、歌に託して後世に伝えようとしています。この思い（訴え）を受け止めたいという思いで「訴歌」と名付けました」と書いている。「訴歌」はもちろん造語である。副題の「あなたはきっと橋を渡って来てくれる」は、辻村みつ子氏が、ハンセン病療養所に「あなた」が、訪ねてくれることを待ちわびた心の叫びである。家族との関りも切られ、療養所で病と闘い、死を見据えての言葉は、限りなく重い。戦争犯罪人として死刑になった人々が書き遺した大著『世紀の遺書』は、死刑を受け入れ、家族、友人、国に心の中を吐露した言葉はあまりに重く、読み進むことができなかった。『訴歌』も全く同じように、心を奪われ、涙なしには読めなかった。孤独の中で、衰えゆく自分と死を凝視する極限状態にある時、真実の言葉は吹き出てくる。『訴歌』は魂を揺さぶる歌集である。

ハンセン病の特効薬プロミンが発見され、完治可能になり、世界では、ハンセン病者は社会復帰していたのに、日本では「らい予防法」(1907年制定)の下、怖ろしい伝染病と教え込み、隔離政策は当然視されていた。隔離政策は、1996年に予防法が廃止されるまで90年余り続き、彼らは言われなき苦悩を背負わされた。2000年にブラジルに行った時、堀江節郎神父に、ハンセン病者だった人の多く住む村に連れて行かれ、車椅子に乗る元ハンセン病者たちと出会った。彼らは身体障害者になり、帰る家、家族もなく、共同で施設に住んでいた。堀江神父に倣い、互いにハグし合った。ハンセン病に対する誤解を解かれていたからである。帰りに、あなたがたはハグしてくれたと喜ばれたが、彼らの受けた差別と孤独の深さを身に感じた。

『訴歌』は300頁くらいの単行本で「はしがき」も「あとがき」も短く、歌や句の解説も全くない。命の一行詩が小さな文字でぎっしり書き込まれている。それをあなたの感性で読んでくださいという編集の意図が受け止められる。特異な状況にある人々は悲嘆にくれ、深い闇は計り知れない。しかし、些細な変化に感動する心があり、言葉がある。命の息吹を伝える術は常人の達するところではない。一部を紹介し、感想を書きたい。

「またくると中折帽子をふりし父を待ちつづけきぬこの三十年(松島朝子)」 娘を療養所に預け、「またくるよ」と帽子をふりながら帰って行った父は30年、訪ねて来ない。この孤独感はどれほどのものか。父の言葉と後姿が忘れられない。父とすれば、ハンセン病の娘がいることを隠したかったのではないか。林力氏の『父からの手紙』には、ハンセン病の父を見舞いに行く時、人に知られないように細心の心使いをしたと書いている。

「足萎えの吾が足音を聞きとめて窓辺の盲人(とも)は呼びとめるなり(田原博)」 彼は病気で足が不自由である。あの歩き方を知る盲人の友が、呼びかけてくる。病を負う者同士、互いを知り抜き、優しい交流があったのであろう。ホッとする歌である。

「春の夜明日断つ足をじっと見る(中村美芙蓉)」 病気で足が壊疽したのであろう、切断するという。切断する前夜、その足をじっと見入っている。「脚一本仏に返し日向ぼこ(松原雀人)」切断した脚は仏に返したと達観して、お日様を楽しんでいる。足がなければ、歩けないではないか。それを受容する心を詠んでいる。

「あはれなる思い重ねし果てにして今限りなく療園を愛す（吉田文雄）」ハンセン病に冒されたことを悔やみ、療養所での生活にどれほど苦悩してきたことであろうか。しかし今、療園の生活を限りなく愛すると歌っている。これまでの長い道のりを思う。

「おのが身の骨削らるる鑿（のみ）の音きく苦しきも生きの証ぞ（林みち子）」鑿で骨を削られるような苦しみがあるが、それこそが生きている証であると言う。人は耐え難い苦しみに遭う時、死を願う。しかし、彼女は苦しみに「生」を見ている。「痛み走る膚（はだ）生きてる生きてる（島洋介）」島氏も、皮膚の痛みに「生」を感じている。

「潔らかなみ骨となりて子に抱かれ帰宅する病友（とも）を羨（とも）しとも見つ（松永不二子）」病苦を慰め、励まし合ってきた友が亡くなり、遺骨になった。その遺骨が子どもに抱かれて、故郷に帰るのを見て、羨ましいと思う。羨ましく思うのは、病苦から解放されたことであろうか。故郷に帰ることであろうか。「遺骨さえ帰郷拒まれ鳥曇（川武甲）」遺骨になっても帰郷を拒まれ、帰れないと詠んでいる。

「宿命を逃るるすべもついになし暗く消えゆく一家心中（大仏正人）」ハンセン病患者が出れば、周りから疎外され、差別される。逃れる術のない一家は心中した。あまりに過酷な扱いを受けたハンセン病患者を出した家族の暗く、悲しい事実を詠嘆している。

「しんしんと深まる夜なり線路上に一度寝かせし吾子ぞ抱き取る（千本直子）」子どもと一緒に死のうとしたが、生き別れる悲しみを受け入れ、ハンセン病の母は療養所に入ったのであろう。隔離政策は家族を無残に切り裂いたのである。

「生きのびる力句になり詩（うた）となり（茅部ゆきお）密かにも詠み残されし歌のほか患者らの惨劇伝ふるものなく（山本吉徳）」歌う思いが生きる力となった。それが『ハンセン病文学全集』を生み、『訴歌』につながった。人間は言葉を持っている。その言葉で人は喜びもし、悲嘆にも暮れる。心の思いを真っ直ぐに伝える言葉は、それが惨劇であっても、生きる勇気を与えてくれる。言葉を持つことは幸せである。大切にしたい。

「母われの乳房も知らず育ちたる子の肩幅の広きをまさぐる（山下初子）」生んだ子に乳房を与えずに療養所に来て、盲目になった。訪ねて来てくれた息子の肩幅をまさぐり、その広さを感じ、申し訳なさ喜びで言葉を失った母の息子との再会に感激する。

「嫌はれる病ひにあれば自殺せよと吾に迫れる母を憎まず（村上北秀）」自殺を迫った母の言葉を北村は憎まずに聞けたと言う。ハンセン病はこれほど嫌われていたのである。

「濃き闇の向ふになにか在る思ひ心に持ちて歩みつづける（赤沢正美）」漆黒の先に何が在る、それに希望を託して、今を生きて行く。「白杖に夢の火種は絶やすまい（五津正人）」目が不自由で白杖に頼っているが、希望の火種だけは絶やさずに生きる。暗闇にいた時の自分の姿を思い出し、何とふがないことであつたかを恥じ入る。

「愛情は性欲ならず諸共に病み経（ふ）る命かけて結べる（鈴木靖比古）」鈴木氏は、夫婦は肉欲で結ばれるのではなく、長く病み続けたお互いをいたわり、命をかけて結び合っているのだと歌う。「待ちわびし春とも遅すぎた相聞（そうもん）とも淡淡と麻痺の手重ねあう（沢田五郎）」沢田氏は、自分たちは麻痺した手を重ねて、夫婦の愛が通じ合っていると歌う。静かな、しかし、何より強い絆で結ばれ合っている。

『訴歌』から、ハンセン病患者を長く、理に反する仕打ちをした事実を記憶すること、そして、差別を乗り越え、苦しむ病者と共にあるかという訴えを、涙と慟哭をもって聞いた。また、極限の苦悩から、命の尊厳を多角的に歌い上げた言葉に深く感動した。